プロを輩出するチーム

Jクラブ編

ジェフユナイテッド市原・千葉U-15

「U-15から世界に飛び出す選手を」

**阿部勇樹、佐藤勇人・寿人、山岸智ら、日本代表クラスに
ジェフユナイテッド千葉の下部組織出身者が名を連ねている。
ジェフの育成にはどのような秘訣があるのだろうか？
理念と実像に迫り、プロを育てるためのヒントを探る。**

文　安藤隆人
写真　渡辺航滋、編集部

環境面のプラスとマイナス

プロの育成機関として真っ先に思い浮かぶのはJクラブの下部組織である。そのなかで今、一番重要な位置を占めているのは、ジュニアユースである。ユースはすでにプロに向けて洗練する場になっており、ジュニアユースはその入り口にある。では、その入り口であるジュニアユースでは子どもたちに何を求め、どうして指導していこうとしているのか。

ジュニアユース世代の老舗チームともいえるジェフ千葉U-15を統括する池上正氏に話を伺った。

■■■

――まず、ジェフ千葉の下部組織の環境面についてお聞かせください。

まずJリーグ全体で言えば、各クラブの下部組織は環境的には非常に恵まれています。ハード面においてもソフト面においても。ただ、ジェフも同じようにそうかというと、なかなか難しい問題を抱えています。まず自前のグラウンドがありませんし、すべて企業のグラウンドをお借りしています。とくに週末に大会や試合を開くためには、私たち自身が自由に使えるグラウンドを持っていませんから、どこかを借りなければなりません。幸いにもホームタウンの市原市はサッカーができるグラウンドがたくさんあるので、お借りできている状況です。

ジェフのU-15には、習志野と辰巳台という2つのチームがあるのですが、習志野は企業が持つアメリカンフットボールのグラウンドを共有させてもらっています。人工芝ですし、クラブハウスもあります。そこは非常に環境は整っていますね。ただそこも週末になると使えなくなってしまいます。一方、辰巳台は土のグラウンドですし、サイズも若干小さい。クラブハウスもプレハブ小屋しかないという環境の違いがあります。

――Jクラブの下部組織といえばプロと同じように立派なグラウンドがあって、整ったクラブハウスがあってというイメージを持ってる方が多いと思います。

ジュニアユース世代の大会は地域リーグなどの場合だと、土のグラウンドで試合を行なうケースが多いんです。そういう面から考えると、別に土のグラウンドで練習することが、マイナスではないと思っています。逆に習志野は人工芝でずっと練習しているがために、土のグラウンドで試合をすると、いつもやっているプレーどおりにはいかなく、本来の力が発揮できなくなるといったマイナス面がありますね。

――もちろん選手それぞれの特性もあると思うのですが、恵まれた環境で育つというのはサッカー選手としてプラスなのでしょうか？

グラウンドの面から考えると、芝のピッチでしかやってこなかった選手は技術的にやはり弱い部分があると私は思っています。例えば土のグラウンドで練習すれば、足の跡がついていたり、雨の日は水溜まり

出身Jリーガー

佐藤勇人	ジェフ千葉
山岸智	ジェフ千葉
岡本昌弘	ジェフ千葉
工藤浩平	ジェフ千葉
竹田忠嗣	ジェフ千葉
金 東秀	ジェフ千葉
中後雅喜	鹿島アントラーズ
阿部勇樹	浦和レッズ
酒井友之	浦和レッズ
山本英臣	ヴァンフォーレ甲府
村井慎二	ジュビロ磐田
佐藤寿人	サンフレッチェ広島

など

よいプレーを比較するのと、人を比較するのとは別

池上正（いけがみ・ただし）
1956年生まれ。大阪体育大卒業。青少年育成同体の大阪YMCAを経て、ジェフユナイテッド千葉・市原の育成普及部長に。小中学校などにサッカーを教えるために無料訪問する「おとどけ隊」のリーダーも務めている。

があったり、コンディションが悪い状況でもやらなければいけないわけですから、ボールコントロールは当然難しくなります。そういった環境でもプレーできれば、技術レベルが高い選手が生まれますし、悪条件の中でも思い通りの動きができる。あまり技術がない選手は、綺麗なグラウンドでしかできないんです。必ずしもJクラブのジュニアユースに入ったら、芝生でやらなきゃいけないかというと、私はそうではないと思っています。

指導者の一言が子どもにも影響する

近年、若年層のサッカーをする環境は劇的によくなった。とくにJクラブの下部組織の環境は良化の一途を辿っている。しかし、それは全体から見ればあくまでまだごく一部にすぎず、大半のサッカーチームはまだ土のグラウンドを使用しているというのが現実である。すべてが整ったいい環境でやらせることが、本当に子どもたちにとってプラスなのだろうか。

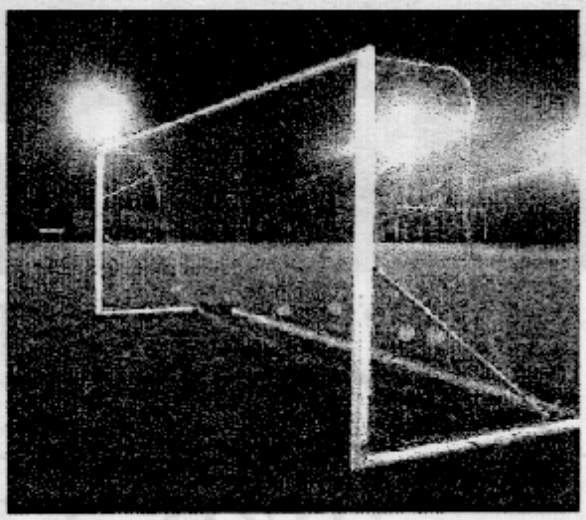
「環境の良し悪しは子どもたちのプレーを左右しますが、指導者への影響も大きいと思います。土のグラウンドで大会がありますよというと、いいグラウンドでしかやっていない指導者は『こういうグラウンドでは自分たちのいつもの力が出せない』というんです。それをついつい子どもたちにも漏らしてしまう。反対にいつも土のグラウンドでやっている指導者はそんなことは言わないし、芝のグラウンドで試合をすれば『いつもよりもっといいプレーができるよ』と話ができるわけです」

土のグラウンドや悪いピッチコンディションで戦って敗れたとき、指導者が敗因のひとつを環境のせいにしてしまうと、それを聞いた子どもたちは、「コーチが言うならそうなんだ」と思ってしまう。自分の技術の甘さや課題を見つめることの隠れ蓑になってしまいかねないのだ。最近、「グラウンド状態が悪くてパスがつながらなかった、力が出せなかった」という言い訳をする子どもが増えてきているという。その言葉は純粋に子どもたちの口から出たというよりも、まわりの大人たちに感化されて出

た言葉ではないだろうか。子どもたちが成長する環境を作るということは、ただ整備されたいい環境を与えることではない。そのときの環境下で子どもたちにどう主体性を発揮させてあげるか。どんな環境であろうと、子どもたちにどうサッカーを楽しませ、努力させるかが重要となってくる。指導者の一言は思っている以上に子どもたちに影響を与えているということをもう一度考え直さなければならないと、池上氏は指摘する。

「指導者にしろ、選手にしろ、今日はグラウンドが悪かったねという言葉がゲーム分析の中に出てくることはあると思います。『今日は仕方なかったよ』とあきらめてしまう指導者もいるでしょうし、反対に『ピッチコンディションが悪くても、しっかりしたプレーができるようになろう』と前向きな指導者もいます。

ただ、最近多くのJクラブ下部組織のチームは大会になると芝のグラウンドでやることが当たり前になっています。そこがちょっと問題じゃないでしょうか。まだまだ日本全国をみてもそれほど普及しているわけではないし、そういう意味ではちょっと贅沢になりすぎているのかなとは感じています」



ジェフ千葉U-15は辰巳台と習志野の2つがある。こちらの土のグラウンドの辰巳台。

環境の整備、発展はたしかに必要ではあるが、皮肉にもそれがもたらした弊害もある。これからこの点をどうクラブが工夫して取り組んでいくかが、各クラブ下部組織のチームカラーとなっていくだろう。

「人を感じる」グループ戦術

――技術に関してお聞きします。子どもたちがより上を目指すために必要な技術はなんでしょうか？

グループ戦術がまだまだ欠けていますね。私のイメージでは13歳くらいまでに基本的なグループ戦術を身につけてはしいなと思っています。13歳までにグループで戦えるようになって、15歳には監督が求める戦術がこなせるようになってほしいですね。

今、日本のどの年代でもいわれているのは、数的優位のときにどう攻撃するかという問題です。例えば2対1でボールを持っているよりも3人で攻めたほうがボールは取られなくなり、4人になるともっと取ら

れなくなる。ヨーロッパや南米はそういったグループでの戦い方が若年層からできていますが、日本サッカーはまだそこまでは到達していません。2対1なのにボールを取られる。3対1でもボールを取られる。グループとして機能いないんですね。そういうところをもっと早くから対処しなければいけない。

――グループ戦術とチーム戦術の違いが曖昧に理解されてしまっていますよね。

チーム戦術というのはチームが抱えている選手をより効率的にどう生かすかということ。グループ戦術というのは味方をどう使うのかということで、チームのベースとなるものなんです。「味方を感じる」ということですね。アイコンタクトという言葉がありますが、そのアイコンタクトの本当の意味をまだ理解できていない。味方を見てはいるけど、自分勝手なプレーをしてしまう選手が多いように感じます。そこが変わらない限り、子どもたちも伸びないし、日本のサッカー全体もよくならないと思うんです。本当にお互いの思いが通じ合ってパスが流れていくプレーはなかなかない。ヨーロッパの一流のチームはそれが常にできています。

――では、そのグループ戦術を徹底させるためにはどうすればよいのでしょうか？

グループ戦術の具体的な考え方や技術について教える前の段階として、常に「人を感じる」ことが大事だと思います。例えば、バスに乗って試合に行くとき、日本のプロ選手も子どもも、みんなそれぞれ一人になって音楽を聴いたりしている。じゃあブラジル代表はどうかというと、バスの中でリンバを踊っていくわけです。サッカーはチームでするスポーツです。だから、みんなで盛り上げていくのが大事なんです。宿泊ホテルなんかでも、Jリーガーもそうなんですが、シングルルームなんですよね。世界の代表チームでシングルルームで泊まっている国はあまりないですよ。ブラジルなんかはトリプルルームなんて場合もあります。日本人はどちらかというと1人になりたいタイプが多いでしょう。でも、1人になりたい選手たちを集めてチームプレーであるサッカーができるはずがないんです。だから、今、U-13を教えているコーチに言っているのは、常にチーム全員で何かをして、携帯電話なんかいじらずにみんなでトランプしたりしてくれと言っています。

相手を思いやり考える子どもに

筆者は先月ポルトガルに行き、ポルトガルのユース年代のサッカーを取材した。そのとき感じたのが、どのチームも連動性が高く、戦術が洗練されていた。関係者に話を聞くと、「別に戦術練習を徹底してやっているわけではない」という答えが返ってきた。全員が高いスキルを持ち、かつ普段の練習から2対1、3対2、4対2などの数的優位のトレーニングを積んでいくことで、グループで攻めて守るという意識を選手それぞれがしっかりと身につけているから可能であるというのだ。

近年、日本では子どもたちをとりまく環境は大きく変わった。携帯電話やゲーム、パソコンの普及によって、人と会ってコミュニケーションをする機会が減った。また、家庭においても少子化の影響でひとりっ子が増えたり、兄弟がいても部屋が別々だったりと、関係性を作るという協調性や他人を思いやる心は、複数の人との係わり合いの中から生まれてくるものである。こうい

ったことは「サッカーのうまさ」とはまったくの無関係と捉えられがちだが、サッカーにおいて非常に重要なことであり、プロにも直結する大事な要素なのである。その点は池上氏も強調する。要するにグループ戦術をやる上で相手のことを思いやること、考えてプレーすることが必要不可欠であるからだ。多分あいつならここに走るはず、こういう意図を持っているはずと感じてプレーすることで、より高い連動性が生まれてくる。

U-15からアヤックスやACミランに

グループ戦術をする上でベースとなる「相手を思いやる心」を養うために、ジェフの下部組織では昨年、千葉市の少年自然の家で、200人にもなるU-18とU-15の選手全員を集め、研修会を開いた。そこでは、年齢の関係なくグループを作って、それぞれでゲームしたり、作業をしたりなど集団体験学習を行なったのだ。

「そういった経験がいい選手を育てると思うんです。研修会の目的は子どもたちの人間性を高めるためです。人間性を高めると

日本代表としてプレーし大きな飛躍をした山岸智。これからのジェフを背負う1人である。

いうのは、仲間を感じるということですから、間違いなくチームプレーが向上するんです。

ここ最近、子どもたちのサッカーを見ていると、味方が今どんな状況にいるのかを感じ取れないという現象が起きています。味方がチャンスなのか、困っているのかどうかを感じ取れない選手がいるんです。だからこそ、いろいろな経験を積ませ、他人と密にコミュニケーションする必要性を感じているんです。他人と一緒にいたくないと思っている子どもがチームプレーをできるわけがないですから」

他人との関わりを積極的に持つ機会をクラブ側が作る。今後もこの取り組みは続けていき、将来的には夏休みを使った1カ月の長期体験合宿も計画しているという。

「人間性を高めるだけでなく、自分で判断する力を養うために、昨年、U-15のある学年が兵庫県で行なった合宿を、現地集合・現地解散にしたんです。3人程度のグループで行動させて、現地に行く途中でどこかで観光旅行してからおいでと伝えました。現地までの計画を自分たちで立てて、親とも相談して決めるんです。『途中大阪に寄って、たこ焼き食べていきます！』とかみんなそれぞれユニークな企画を実行していましたね。自分で考えて決めて、そして行動をする。そんなことが当たり前になってほしいです」

この試みの成果はすでに出ている。

「やっぱりその学年の子たちは非常に個性的ですね。その効果はゲームにも表れています。彼らは非常に伸び伸びとプレーしいますし、たとえミスしようが何しようが恐れていない」

技術を磨くのと同じ以上に人間性を磨いていく。その上でグループ戦術を徹底していく。これがジェフ千葉U-15のコンセプトであった。

最後にジェフ千葉U-15が掲げる今後の展望を聞いてみた。

「世界では16歳の時点でプロのトップレベルでプレーしている選手がいます。ジェフではU-15からU-18に上げるという目標はやめ、U-15から世界に出そうと言っているんです。うちのU-15からアヤックスやACミランに行けるような選手を育てていこうとしています。そのためには小学生の段階からサッカーにもっと触れさせて、底上げしていかないといけないと考えています。

『1人でいくらコーディネーションしても、相手の動きに対応する能力はつかない』とロシアのある体育学者が言っていました。相手がいて、それに対応して動くトレーニングをしない限り、能力は伸びないんです。これまでよく言われた『技術＝止める・蹴る』は相手がいない場合では有効ですが、実際のゲームの中では、相手がいないなんて局面はありえない。そういう部分を変えて、若年層の段階でいち早くグループ戦術や敵と味方がいる中でプレーできる力を伸ばしていければ、世界に飛び出す選手が出る可能性はあります」

単なるクラブの強化ではなく、世界へ行ける選手を育てる。より大きな可能性に向かって、ジェフ千葉U-15は進歩しているのだ。決してサッカーがうまくなるだけの場所ではない。人間教育という大きな側面を持っていることを決して忘れてはならない。他人との積極的な関わり合い。それこそがサッカー選手として子どもたちが成長していくために必要不可欠な要素であるのだから。